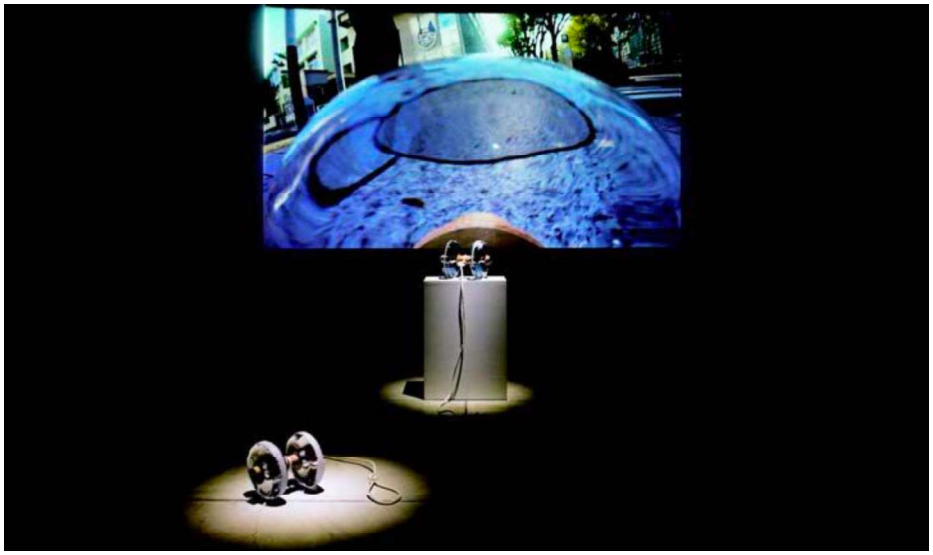
ゴロゴロの風景

市民参加のかたち：制作参加・展示鑑賞

《ゴロゴロの風景》は、作家自身がガラス製のタイヤを転がして都市を移動し、その摩耗や変形を通じて土地の記憶を刻むアートプロジェクトである。シャフトに設置した小型カメラが、転がるガラス越しに風景を撮影し、展示ではガラスの実物と歪んだ風景映像を並置する。展示場所は半暗室を想定し、千葉駅周辺のビルの一室を希望。ガラスは千葉駅・千葉中央駅周辺の清掃で採取した砂埃から作る予定で、交通の要所であるこの地に蓄積された“都市の微細な痕跡”を素材として扱う。本プロジェクトは都市の変容や風景の記憶を記録・共有し、新たな対話と気づきを促すことを目的としており、明確な社会課題の解決よりも、日常の中に潜む問いを提起するアートとして機能する。地元の記憶を共有しながら撮影に同行する協力者も募集している。都市と個人の記憶が交差する旅となるだろう。



Photo：Shingo Kanagawa

地村 洋平

私の制作は、物質が変容し、新たな形を生み出す瞬間に焦点を当てている。金属鋳造やガラスといった伝統的な造形技法を学ぶ中で、熱が物質に与える力に魅了された。熱は、物質の形状を変え、消失や融合、再構築といった多様な現象を引き起こす。その力は、破壊と創造という、相反するプロセスを内包しており、私にとって創作の重要な軸である。この経験をもとに、私はプラスチックや他の現代的な素材をも等価に扱い、伝統と現代が交錯する視点から、多様な表現を追求している。

私の表現活動は、単なる造形表現にとどまらず、インスタレーション、映像、パフォーマンスといった形態を通じて、素材が変容するプロセスを可視化する試みである。特に、熱という普遍的な現象を媒介に、人間の活動が自然環境や物質にどのような痕跡を残しているのか、そしてそれが私たちの日常や未来にどう影響を及ぼすのかを問い直すことを目指している。溶けるプラスチックや歪むガラスは、気候変動や環境破壊といった問題を象徴するだけでなく、そこに潜む美しさや可能性をも浮かび上がらせる。

私たちが生きる現代は、自然と人工の境界が曖昧になりつつある。このような状況下で、変容する物質の姿は、私たちが未来に向けてどのような世界を形作っていくべきかを考える手がかりとなる。熱がもたらす物質の変化は、物理的な現象であると同時に、人間と自然の関係性を象徴するメタファーでもある。その中には、美しさと危うさという、相反する側面が共存しており、私はその両面を通して対話と共創の可能性を示したいと考えている。